

ノーモア・ヒバクシャ通信 第52号

2020年9月11日

ホームページ <http://www.kiokuisan.com/>
継承ブログ <http://keishoblog.com/>
フェイスブック <https://www.facebook.com/kiokuisan>
ツイッター <https://twitter.com/nomorehibakusha>

発行者
NPO 法人 ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会
〒102-0085
東京都千代田区六番町 15 プラザエフ 6F
TEL/Fax 03-5216-7757 (直通)
Email hironaga8689@gmail.com
郵便振替口座 00110-5-292881
口座名義 ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会

I. 「NO MORE HIBAKUSHA レポート2020」の発行について	1
会員拡大・寄付金呼びかけにご活用を	
II. 第1回理事会の報告	2
III. 7・21「未来につなぐ被爆の記憶」オンラインセミナー開催報告	3
IV. 8・1「未来につなぐ被爆の記憶」夏休み親子企画の報告	4
V. 国際平和博物館オンライン会議への参加報告	5
VI. 資料庫部会より	
(1) 文学・芸術文献目録の公開 (2) 夏休みの史料整理	6
(3) 書籍のご寄贈 ありがとうございます	7
VII. 【各地の活動】奈良・平和ライブラリの資料整理	7
VIII. 【資料】被爆75年 核兵器をめぐるアメリカ世論の変化	(別紙)

I. 「NO MORE HIBAKUSHA レポート2020」の発行について

「NO MORE HIBAKUSHA レポート」は、この一年間の継承する会の活動を分かりやすくビジュアルにお知らせして、この会への理解と共感をさらに広げていただくために発行することにしました。同時に発足以来8年半が過ぎ、「長期ビジョン」に基づき積み重ねてきた取り組みの実績や成果についても、折に触れて紹介していきます。

当会は、2011年12月10日に設立総会を開催、「長期ビジョン」などを採択し発足しました。《ビジョン》がめざした内容の要旨は、次のとおりです。

(はじめに)

人類史上未曾有の核兵器使用が人間に何をもたらしたのか、原爆被爆者をはじめとする多くの人々が被害の実相の究明・普及のために長年にわたって努力を積み重ねてきました。～人類の宝物ともいふべきその資料を未来に残す遺産として継承し、普及・活用していくことは、私たち、被爆者とともに今を生きる人間の、歴史に対する責務といえるでしょう。私たちは、「ふたたび被爆者をつくるな」という願いのもとに、～原爆被爆者の記憶遺産の継承という壮大な構想の実現に向けて取り組むこととしました。

(私たちの構想)

1. 私たちは、「ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産の継承センター」の設立をめざします。

(その目的は、・日本被団協をはじめとする被爆者運動関連の記録や資料・データの収集・整理に取り組みます。・若い人々に活動への積極的な参加を求めるとともに、戦争をしらない若い人々への平和教育や平和活動に情報・資料を提供します。などにあります。)

2. 私たちは、被爆国から国内外に原爆被害に関する情報を責任をもって発信し続けることのできる公共機関として、「ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産平和資料館」の設立をめざします。
3. 国連機関などをつうじて原爆被害の実相が国際平和のために普及・活用され、人類共有の記憶遺産として恒久に保持・継承されることをめざします。

今や、ビジョンの第1段階「センター設立」の時期を迎えることができたと考え、センター設立のための6億円募金を開始しました。そして、センターを設立し安定して運営を継続していくためには、この会の会員がさらに大きく広がり、財政的な基盤を確立するとともに次代を担う人々の活動や運営への参画が期待されています。

◆ 会員拡大・寄付金呼びかけにご活用を ◆

「NO MORE HIBAKUSH レポート 2020」は、主な内容として「継承センターを東京につくり、世界に発信することをめざします」「被爆の記憶を若い世代が受けつぎ、参加と交流をすすめています」と、紹介しています。詳しくは、同梱のリーフレットをご覧ください。これを活用して会員を広げていただきますよう、どうかよろしく願いいたします。必要部数をメールでご連絡いただければ郵送いたします。(Email:hironaga8689@gmail.com)

II. 第1回理事会の報告

標記理事会は7月25日(土)東京四谷プラザエフで、コロナ禍のもとZOOMによるオンラインも活用して、開催されました。審議事項は、1)「NOI MORE HIBAKUSHA レポート 2020」の発行について、(活動紹介だけでなく)会員の声や記事、理事の声もあるといい、など意見がありました。2)改定HPのプレゼンテーションについて、被爆者運殿の歴史をどう受けつぐか、Webサイトを通じてだれに何を伝えるのか、貴重な資料を集め歴史的な価値あるものとして学術的な面があってもよい、など意見がありました。また、この会のネット環境全般について再検討することも確認しました。

報告事項では、「未来につなぐ被爆の記憶」オンラインセミナーの報告に関連して、◇オンラインの活用は、①全国どこでもだれでも参加できる、②全国に被爆者がいることが可視化できる、③被爆者と親しくつながることができる、◇8・1「親子で学ぶ原爆ってな～に」の企画に注目している(NHK報道番組で放映された)、◇身近な交流の可能性がありイベント企画が考えられる、など発言がありました。

全体として、この度の理事会の運営や論議は、これからの理事会や活動のあり方についてオンラインによる取り組みが不可欠であることを感じさせるものとなりました。

Ⅲ. 7・21「未来につなぐ被爆の記憶」オンラインセミナー開催報告

標記セミナーは7月21日（火）13:30～15:00、東京四谷プラザエフをメイン会場にオンラインで（全国どこでも参加可能）開催され、参加者は報告者、事務局を含め全国から65名の方々が参加されました。その概要を以下に報告します。

【報告の概要】

■ 「未来につなぐ被爆の記憶プロジェクト」の公開デジタルシステムの説明

（報告者：ダーウィンエデュケーション株式会社 田村社長）

- ・ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会の公開デジタルシステムを、実際に画面を見せながら説明。（被爆証言）表示はデジタルアース上だけでなくリストでも可能。
- ・生協が公開したCO・OP PEACE MAPにもデータ連携している。平和に関する活動は異なっても、システム面で統合可能。

■ オンラインを活用した平和活動の事例紹介

（報告者：東京大学情報学環 渡邊英徳教授）

- ・オンライン証言会など、オンラインを活用した活動のメリットなどの説明。
- ・渡邊研究室で開発し取り組んでいるヒロシマ・アーカイブ、ナガサキ・アーカイブ、記憶の解凍（白黒写真のカラー化）の説明。
- ・白黒写真では過去のこととして理解されているできごとともカラー化することで自分たちのこととして理解できる。

■ オンラインを活用した平和活動の体験紹介

（報告者：継承する会ボランティア・スタッフ、並川桃夏さん）

- ・平和活動にかかわるようになったきっかけ、広島女学院時代の活動紹介。
- ・ヒロシマ・アーカイブの取り組みを通じて被爆の証言を残すことの大切さを学んだ。
- ・継承する会の「未来につなぐ被爆の記憶プロジェクト」の3つのポイント、①全国どこでも、個人でもイベント開催ができる、②全国に被爆者がいるということを可視化できる、③被爆者と親しく語り合えるようになる。
- ・きっかけは何であれ、活動することの大切さを自分の言葉で説明された。

【参加者の感想】

参加者のアンケートでは、感想が多数寄せられましたが、そのうちの一部を抜粋して紹介します。

- 核兵器廃絶、平和の活動への参加・関心を広げる可能性、未来にこれらの活動が繋がっていく可能性を感じ、今後の展開が楽しみになりました。
- 自宅に居ながら、原爆の悲惨さや平和の大切さを学ぶことができ、現地に行かなくても被爆者の体験を知ることができることができました。
- 未来につなぐ被爆の記憶プロジェクトの内容を知ることができたこと、オンラインを活用した平和活動について知ることができたこと、何より、若い並川桃夏さんの取り組

みと思いを直接お聞きできたことが何とも心強かったです。

- アーカイブの取り組み、被爆証言の継承活動、オンライン開催の運営などについて学ぶことができた。
- 若い方たちや大学の先生から、AI、アプリ、デジタル化など新しいやり方で、被爆の実相、被爆体験の継承について学び、とても新鮮な刺激を受けました。是非、活用したいです。
- デジタル資料を利用した平和活動について、とても参考になった。

【今後の課題】

ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会、未来につなぐ被爆の記憶プロジェクトの公開デジタルシステムを広く知っていただくためには、実際にこのシステムを活用した企画を各方面と共同して取り組むことが何より重要です。会員の皆さまからも、企画をさまざまに持ち込んでくださるようお願いいたします。

【未来につなぐ被爆の記憶専用サイト】

以下の URL または右の QR コードからご覧いただけます。

<https://kiokuisan.org/>



IV. 8・1 「未来につなぐ被爆の記憶」夏休み親子企画の報告

8月1日、継承する会初のオンライン企画として、「親子で学ぶ げんばくってな〜に？」を開催しました。



昨年12月からこの企画のボランティアを募集、2月から毎月一回のペースで証言していただく木内恭子さん（9歳、広島被爆、しらさぎ会）と一緒に、2020年7月に浦和コルソで開催される埼玉戦争展に向けて、小学生と保護者を対象に親子で学び、考え、話し合い、それを「未来につなぐ被爆の記憶」専用サイトで発信する1時間の参加型のプログラムの制作を進めてきました。その後、コロナ感染症拡大のために埼玉戦争展は中止になったため、会場企画をオンライン企画に切り替えて開催することにしました。

プログラムは導入としてクイズ形式で原爆について学び、小学生の男の子と女の子が木内さんにインタビューする形で被爆したときの様子をお聞きし、その後、質問・交流というもので、NHKも取材に入り、取り組みの様子が18:45と20:45の首都圏ニュースで報じられました。



参加いただいたボランティアの方、YouTube で視聴いただいた方から「小学生の子たちと被爆者が一緒に作り上げた時間だなというのが伝わった」「私の友人もリアルタイム、その後のアーカイブで見てくれて、内容もわかりやすかったから世界に発信して欲しい！ オンラインで被爆体験を聞けるのはすごく良い！などと話してくれました。これからも関わっていけたら嬉しい」「小学生向けの企画ではありましたが、大人が聞いても多くのことを考えさせられるものでした」「（木内さんにインタビューした）娘はこの親子企画以降、以前よりもこども新聞で戦争や原爆についての記事を熱心に読むようになり、関心を持つことの重要性を改めて感じました」などの感想をお寄せいただきました。



引き続き「未来につなぐ被爆の記憶」プロジェクトのボランティア企画として、被爆者の方や被爆体験の継承に取り組んでいる個人や団体との共同企画として、今回のようなオンライン企画を進めていきます。

オンライン親子企画の様子は左のQRコードからご覧いただけます。視聴時間は約30分です。

V. 国際平和博物館オンライン会議への参加報告

第10回国際平和博物館会議が9月16日～20日の期間、コロナ禍の影響でグローバル・オンラインイベントとして開催されることになりました。すべて英語でオンラインのもとに行われます。INMP通信No.38「ジェネラル・コーディネーター（安齋育郎さん）のデスクから」の一部を抜粋し、オンライン会議の仕組みをご紹介します。

（冒頭省略）～。参加者は、4日間の会議中に録画されたプレゼンテーションの閲覧をご自身でスケジュールを立てて見ていただくこととなります。会議の最終日である2020年9月20日以降も、多くの発表はオンラインの『会議報告者』に掲載されますが、掲載許可が下りなかった発表については、抄録のみの掲載となります。

公式行事とともに事前登録の各種イベントが開かれ、発表者は「発表料」を支払い「登録」エントリーすることができます。

継承する会はビデオ映像による発表で参加することにし、すでに次の2本の映像作品（英語字幕）を提出しました。一つは、「原爆は人間として死ぬことも生きることもゆるさなかった」（DVDより岩佐幹三さんの被爆証言を抜粋：英文名「THE ATOMIC BOMBING EXPOSED」）、もう一つは、「声が世界を動かした」（核兵器禁止条約の採択に至る、日本の被爆者運動の歩み、並びにその記録を収集・整理している継承する会の活動を紹介している。英文名：「Voices Moved the World」）。

関心のある方は、以下のURLにアクセスしてください。

<https://sites.google.com/view/inmp-2020/home>

VI. 資料庫部会より

(1) 文学・芸術文献目録の公開について

継承する会は、発足以来現在までに収集・整理してきた書籍・冊子類のなかから、文学・芸術関連文献（原爆文学／童話・絵本・漫画／原爆芸術（写真／絵画／映画／演劇など）／戦争文学、計 1300 数十点）の目録を、このほど継承する会および日本被団協のホームページで公開しました。

合わせて、目録にない関連文献についての情報提供やご寄贈を呼びかけています。みなさまのご協力をお願いします。

(2) 夏休みの被爆者運動史料整理

昭和女子大学の学生さんらによる夏休み恒例の被爆者運動史料の整理作業は、今年は新型コロナウイルスの感染防止のため、人数を 1 日 2 人にしぼり、また作業時間も短縮して行っています。

夏休み前半は、8 月 1、5、7 日の 3 日間。春休みに開始した写真の整理をすすめるとともに、初参加の 1 年生には、被爆 50 年に実施した被団協の原爆被害者調査の自由記述回答を整理してもらいました。

被爆者たちの生のことばに初めてふれた参加者からは、以下のような感想をいただきました。



○ 私は東京都の調査票を整理させていただきました。ほとんどの資料に「戦争は 2 度と繰り返してはいけない」と書かれていましたが、その中でも印象に残った言葉が二つありました。「最近の人は戦争をゲーム感覚で見ていることに危機感を感じる」「今後のはのんびり過ごしたいと思います。勝手なことを書いて申し訳ありません。」

特に、2 つ目の言葉について、被爆者の方の中にも「戦争はいけない」「ノーモアヒバクシャ」と言い続けなければいけない雰囲気があり、のんびり過ごしたいと書きにくい雰囲気があったのだらうと思いました。

○ 被爆者の方は核廃絶を強く願っていること、被爆といっても様々な被爆状況があること、法令に関して賛否両論であることがわかりました。

被爆者の方自身が書いた直筆の言葉は 1 つ 1 つに重みがあるととても感じました。

○ 調査票は直筆だからこそ、生身の人間がどんな思いで筆を手にしてこの感想を書いているのか、そう考えながら資料の整理をさせていただきました。何も回答がなかったアンケートも 1/3 近くあり、白紙を見るたびに悲痛な叫びに触れないで済むという少しの安堵と、きっと書けない書きたくない理由が、私たちなんかには到底理解しえない葛藤があったのだらうという恐怖心が芽生えたのを今でもはっきりと覚えています。

私たちは経験していないので、どこまでいっても想像することしかできません。けれども、当時の人々の話を聞き対話をすることで、理解を深めることはできます。わからない

から、無理だから、と遮断するのではなく寄り添うことが大事なんだと今回の資料整理やお話を聞いてひしひしと感じました。資料整理以上のお話と経験が出来ました。またこのような機会があれば積極的に参加していきたいです。

9月10日からは、夏休み後半の史料整理作業がはじまっています。

(3) 書籍のご寄贈、ありがとうございました

○ 染谷繁實さんより、名越操著『ヒロシマ 母の記—史樹の「死」を生きて』(1985)、児玉克哉著『原爆孤老 流転の日々』(1987)、広島・長崎の証言の会編『イルボンサラムへ(日本人へ)—40年目の韓国被爆者』(1986)、創価学会婦人平和委員会編『ヒロシマの心・母の祈り—平和への願いをこめて』(1982)など手記・体験記を中心に33冊。

○ 日本被団協より、2020年NPT再検討会議要請代表団『わたしの訴えとメッセージ』3冊。会議は新型コロナの世界的感染の影響で延期されましたが、参加を予定されていた代表のみなさんの「証言」(日英両文)が英訳ボランティアの協力と日本生協連のNPT行動募金により150ページ余の冊子として刊行されました。

○ 4月に亡くなられた竹本成徳さん(元日本生協連会長)の著書『さいごのトマト—ヒロシマを、わたしじしんの「ことば」で』およびその英訳本『LAST TOMATO—Hiroshima in my own words』各5冊を、ご遺族の竹本節子さんより。

○ 大庭三枝さん(福山市立大学)より、幼児向け紙芝居「被爆アオギリ物語 そばにいるよ〜いっしょにあるいていこう〜」〔「通信」No.50掲載記事参照〕

○ その他、被爆75年の夏に出版された以下の書籍をご寄贈いただきました。

- ・ 山口果林さんより、夏の会編『夏の雲は忘れない—ヒロシマ・ナガサキ一九四五年』
- ・ 木戸季市さんより『生活協同組合研究』2020.8 Vol.535、3冊(木戸「被団協運動を原爆被害者と市民の協働の取り組みに」所収)
- ・ 濱谷正晴さんより、長崎原爆被災者協議会『平和を一被爆から75年を生きぬいて』2冊(濱谷「【特別寄稿】被爆七十年 被爆者運動に思う」、「原爆と人間アーカイブに残る 深堀悟迫真の証言」所収)
- ・ 富山県被爆者協議会より、『想い—広島・長崎ヒバクシャ証言集』3冊
- ・ 調布市原爆被害者の会(調友会)より、調友会50周年記念誌『75年目の広島・長崎を語る—被爆から現在、そして未来へ』3冊
- ・ 戦争をさせない石川の会より、石川県平和委員会／戦争をさせない石川の会『記憶の灯り 希望の宙へ—いしかわの戦争と平和』

Ⅶ. 【各地の活動】奈良・平和ライブラリで資料整理はじまる

8月1日(土)、「平和ライブラリ」の資料整理が一步を踏み出しました。当初3月に予定し、新型コロナの影響で延期されていた入谷方直さんによる資料整理の講習会がよう

やく実現したもの。主催は、ピースアクションをすすめる会・奈良県生活協同組合連合会・市民生活協同組合ならコープの三者です。

2階に平和ライブラリが設けられた「コープふれあいセンター六条」の1階、集会室を会場として、役員を含む13人が参集。入谷さんから被爆証言やわかくさの会の活動記録を継承することの意義・目的、そして整理の方法についての説明をうけ、わかくさの会最終年の会長・市原大資さんが遺された資料を実際に整理しながら学びました。

継承する会の運動史料整理の方法にならった資料整理作業のレジメを見ながら、①封筒入れ、②封筒の表題記入、③目録記入を行い、最後にもんじょ箱（中性紙箱）に収めることができました。

参加者からは、たくさんの感想が寄せられました。

- 貴重な資料を素手で触るのは緊張しましたが、資料保存、未来への伝承の役に立てることはとてもありがたく感じました。ふだん、被爆者の方のお話をきいたり学習したりという機会はあっても、実際自分の手を動かして、具体的に役立てる機会はなかなかないので、充実感がありました。
- 資料タイトルのつけ方に悩みました。…年代、資料の意味（何の資料なのか）などは読み込まないとわからない、つい読みふけてしまいます。それがこの作業の魅力だと思いました。ものごとを丁寧に知り大切に扱うことは人間としてよい学びになりました。奈良の記録保存にかかわることが出来、ありがたく思っています。
- “市原大資”さんという方にお会いしたこともない、お名前さえも初めてお聞きした私が、75年前の市原さんの壮絶は体験、そこからずっと市原さんがこだわって書き留められてきた資料、新聞切り抜きなどを通して、市原さんのたどってこられた人生や途切れることなく抱え続けてこられた思いや願いに触れたいです。
- 本日の史料整理が100年先、200年先の人々に向けての、タイムカプセル作りのような気がして大変貴重な作業だと思いました。風化させてはいけない記憶を継承していくためにもアーカイブ作業は大切です。偶然残っていく資料も過去をあぶり出してゆくひとかけらになります。「あえて残して整理する」ことで「未来へのメッセージ」になるのだ、と思いました。

入谷さんから学んだことを、これからも継続しておこなっていきます。

（ならコープ 岡英幸さんのレポートから）

VIII. 【資料】被爆75年 核兵器をめぐるアメリカ世論の変化

被爆75年のこの夏は、核兵器や戦争被害をめぐる多くの報道がありました。なかでも、アメリカでの世論の変化が印象深く感じられました。

谷口稜暉さんら長崎の被爆者への取材にもとづく『ナガサキの被爆者—核戦争後の人生』（みすず書房）を著したスーザン・サザードさんによるワシントンポストへの寄稿文など、アメリカ国内の言論や世論の変化を【資料】（別紙）でお伝えします。

以上